

「み」について②

前号では、「みい」は「しろぐつな」だと紹介した。そこで、「しろぐつな」に相当する異表記名を18篇の“こふき”資料から抜き出し、その使用例数を図1に示す。

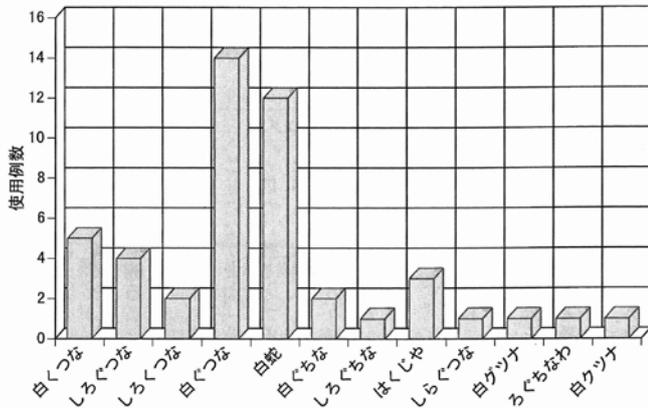


図1. 「しろぐつな」に相当する異表記名の使用例数。

図1に示したように、「白ぐつな」と「白蛇」の使用例数はそれぞれ14例と12例で、ほかに比べて多かった。この二つの表現に注目すべきと考える。

そもそも、「くつな」「ぐつな」「ぐちな」「ぐちなわ」は「くちなわ」という表現に収斂されるのではないか。そして、この「くちなわ」の語源は「朽ち縄」ではないかと考えている。

路上で日向ぼっこをするへびは、確かに朽ちかかった縄と間違えることもあるが、単に姿かたちが似ているだけで名づけられたとは思われない。むしろ、昔から畏怖の対象であったへびだからこそ直接的表現の「蛇」という言葉で呼ぶことができず、当時の人たちは間接的表現として「朽ち縄」と呼んだのではないだろうか。古来、「蛇」のことを「倍美（へみ）」と表現し、「久知奈波（くちなわ）」とも呼んでいた。アイヌの人たちが、「蛇」という直接的な表現は使わず、「長い神様」という意味の「タンネ・カムイ」と呼んでいたのも、その表れではないだろうか。古代人は、あまりにも恐れ多いへびを、直接的な表現では呼んでいなかったはずである。

すなわち、白い蛇（白蛇）のことを「白くちなわ」と呼び、転じて「白ぐつな」と呼ぶようになった。このように、「白ぐつな」は「白蛇」と同じ意味と考えてよい。

これによって、「み」「みい」「白ぐつな」「白蛇」は、すべて同義語だと結論づけることができる。

文献資料の検討

『山海経』の「西山経」に「白蛇」という漢字が登場する。ここでは、この漢字を「みずへび」と呼ぶ。すなわち、「白蛇」は「みずへび」のことであり、「みずくちなわ」は「水蛇」と同義だということになる。また、これまでのことを整理すると、「しろぐつな」とは「白蛇」であり、「水蛇」と同義ということになる。

『和漢三才図会』に「水蛇」の項目があり、「みずくちなわ」というルビがふられている。そこには、『本草綱目』からの引用があり、「水中に生息する。…よく鱧（やつめうなぎ）に化

するものというのはつまりこの蛇のことであり」と記されている。すなわち、「水蛇」は「鱧（今日でいう魚類の“ハモ”ではない）」によく化けるといっているのである。言い換えると、「水蛇」は「鱧」とよく似ているか、あるいは「鱧」そのものと判断することができる。

同様に『和漢三才図会』の「鱧」の項目にも、『本草綱目』から引用したこの動物の形態が簡単にまとめられている（図2）。ただそこには、「蛇と氣を通じており、色は黒く、北方の魚である」との部分も引用されている。そして、わが国では、「鱧は北国の川沢に多くいる。大抵は一尺ぐらい、大きなもので二、三尺である。背は蒼黒で光がある。…河州（かわち）の櫃原川にもいるが、みな小さくて五、六寸以上のものはいない。色も黒くない。…乾物にして多く京師に送るが、あたかも蝮蛇（へび）のようである」という解説が付けられている。

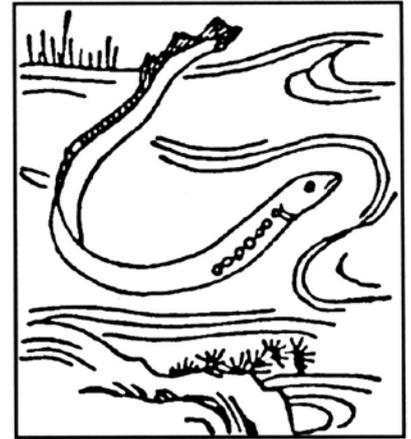


図2. 鱧（『和漢三才図会』）より抜粋。図はヤツメウナギを示す。

“み”は、本当に「ヤツメウナギ」なのか？

「元初まりの話」に登場する水域棲動物は、幕末から明治にかけて生きていた庶民たちに、ふつうに理解できた動物であり、比較的身近な生き物だったに違いない。それを前提にして、“み”を類推する。

「河州」は河内国のことであり、「櫃原」は現在の奈良県橿原市ではなく、大阪府柏原市あたりを指していたと思われる。それは、「柏原」地域は、江戸時代には「河州志紀郡柏原村」と称せられていたことから明らかである。いずれにおいても、大和川流域の地域である。この大和川流域に生息するヤツメウナギは「五、六寸以上のものはいない」ということから、せいぜい5～6寸（約15～18cm）までと考えてよい。

ヤツメウナギの仲間は、1～2尺（約30～60cm）の大型であればカワヤツメかミツバヤツメと考えられ、5～6寸の小型であればスナヤツメかシベリアヤツメを想定できる。「河州」の「柏原村」であれば小型が考えられる。シベリアヤツメはほとんどが北海道に分布することから、スナヤツメが想定できる。奈良県では、昔から「八つ目」と言えばスナヤツメを指していた。大和盆地の方言をみても、スナヤツメのことを小川地区では「八つ目」、上市や王寺地区では「ヤツメウナギ」と呼んでいたという。このスナヤツメの存在は、すでに『皇和魚譜』でも紹介されているように、そんなに特殊な八目鰻（ヤツメウナギ）ではなかったようである。実際、江戸時代に「八つ目鰻」が乾物として流通していたことはよく知られており、一般庶民にも身近な生き物として親しまれ、美味しい食材だったに違いない。

結論は、“み”は「スナヤツメ」ということになる。